

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

平成20年度病害虫発生予察特殊報第2号について

キュウリにおいて、キュウリ黄化えそ病の発生が認められ、特殊報第2号を発表したので送付します。
なお、病害虫防除所ホームページ（www.jpnpn.ne.jp/kagoshima）にも掲載しています。

病害虫発生予察 特殊報第2号

平成20年12月3日
鹿児島県病害虫防除所

- 1 病害虫名 キュウリ黄化えそ病
- 2 病原ウイルス メロン黄化えそウイルス *Melon yellow spot virus* (MYSV)
- 3 発生作物 キュウリ

4 発生確認及び発生状況

平成20年11月上旬に阿久根市、肝属郡東串良町の施設栽培キュウリで、芯葉付近の葉に退緑斑点とモザイク症状、下位葉に黄化えそ症状を呈している株が認められ、県農業開発総合センター病理昆虫研究室が平成20年11月12日にELISA及びRT-PCR法により検定を行った結果、本病の病原ウイルスが検出された。発生を確認している面積は現在のところ2aである。

本病は1996年に高知県で初めて確認され、西日本を中心に17県で発生が確認されている。

5 病徴、伝染方法、感染植物等

(1) 主な感染植物での病徴及び被害

キュウリでは、葉にはじめ葉脈透過を生じ、のちにモザイク、えそ斑点、退緑斑点、葉脈えそ及び黄化などの症状や生育抑制等多様な症状を示す。一見するとマンガン欠乏症などに類似している。病徴が進むと減収につながり、激しい場合には枯死する。果実にはほとんど症状が現れないが、まれに果実表面にモザイク斑を生じることがある。

メロンでは、はじめ葉の葉脈に沿って黄化し、退緑斑点が多数生じる。その後えそ斑点となり、葉全体は黄化する。果実では、モザイクが発生し、肥大停止やネット形成異常となる。また、果肉には淡褐色の斑点が発生する。

(2) 伝染方法

- ①本ウイルスは、ミナミキイロアザミウマによって媒介されるが、他のアザミウマ類による媒介は不明である。アブラムシ類その他の害虫は媒介しない。
- ②ミナミキイロアザミウマは、幼虫時にMYSVに感染した植物を吸汁することで保毒し、その個体が死ぬまでウイルス伝搬能力を持つが、経卵伝染しない。
- ③種子伝染、土壌伝染はしない。また、汁液伝染能力は低く、作業管理により伝染する可能性は極めて低い。

(3) 感染植物

①自然感染が確認されている植物

ウリ科：キュウリ、メロン、スイカ、シロウリ

②接種による感染が確認されている植物

ウリ科：トウガン、ニガウリ、カボチャ、ヘチマ

アカザ科：ハウレンソウ

ナス科：ペチュニア

ツルナ科：ツルナ

ユウガオ科：ユウガオ

ゴマ科：ゴマ

ゴマノハグサ科：キンギョソウ、トレニア

6 防除対策

- (1) 苗による持ち込みに注意し、葉色や生育の悪い苗は使用しない。
- (2) ほ場内及び周辺の雑草は、媒介虫の生息・増殖場所となるとともに、MYSVの中間宿主となるものも多いので除草を徹底する。
- (3) ハウス開口部の防虫ネット（0.8mm目合い以下）の設置や、紫外線カットフィルム等を利用して、施設内へのミナミキイロアザミウマの進入を防ぐ。
- (4) 青色粘着トラップを施設内に設置し、媒介虫の早期発見に努める。
- (5) 育苗期からミナミキイロアザミウマの防除を徹底し、感染及び本ぼへの持ち込みを防止する。
なお、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う（平成20年9月12日付け技術情報第14号参照）。
- (6) 発病株は伝染源となるので、直ちに抜き取りビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。
- (7) 栽培終了時に密閉陽熱（蒸し込み）処理等を行い、ミナミキイロアザミウマを死滅させて、施設外への分散を防ぐ。

7 その他

本病と疑われる症状が発生した場合は、病虫害防除所や最寄りの地域振興局農業普及担当係に連絡する。



【展開葉の退緑斑点】



【上位葉のモザイク症状】



【中位葉のえそ斑点】



【下位葉の黄化えそ症状】

キュウリでの症状